

「教わる力・学びとる力」を備えた保育者養成課程の開発 — 保育関連授業の教授内容の現状と課題 —

野中千都¹⁾ 古相正美²⁾ 山田朋子¹⁾ 松藤光生³⁾
 坂本真由美¹⁾ 吉川寿美³⁾ 倉原弘子³⁾ 桧垣淳子³⁾
 吉松遊佳³⁾ 浦恭子⁴⁾

The Development of Curriculum for Childcare Workers Endowed with Spontaneous Learning and Studying — The Present Situation and The Issues of Content of Childcare Relative Teachings —

Chizu Nonaka¹⁾ Masami Furusou²⁾ Tomoko Yamada¹⁾ Mitsuo Matsufuji³⁾
 Mayumi Sakamoto¹⁾ Kazumi Kikkawa³⁾ Hiroko Kurahara³⁾ Junko Higaki³⁾
 Yuuka Yoshimatsu³⁾ Kyoko Ura⁴⁾

(2017年11月22日受理)

1. 研究の目的

本学教育学部の学生の半数は、保育士資格および幼稚園教諭免許状の取得を目指している。そのほとんどは卒業後専門職（保育士資格、幼稚園教諭免許状を活用）として就職する。保育士資格や幼稚園教諭免許状の取得を目指す学生は、養成校在学中に専門職としての実践力を学ぶ場として計50日間の実習（保育実習・教育実習）を実施している。実習生の多くが、大学で学んだ理論を実践の場で確認することができたり、子どもや保育者に直接に関わることで保育職の魅力に気づいたりしているが、実習生と保育の場での「保育者像」のイメージにずれがあることは否めない。そのずれによって、実習生は保育の場からの評価が気になり本来の目的である実践的な学びの時間を実感できなかつたり、保育の場からは実習生の主体性や積極性に疑問がもたれたりしていることが、実習後の実習園からの評価や実習生自身の振り返り活動から推察できる。

保育士や幼稚園教諭（以下、保育者）を目指す学生には、保育者が多岐にわたる役割を必要とされることに比例した様々な力が求められる。養成課程での学びを修めた後に新任者として採用時まで身に付けられればよいものではなく、保育実習や幼稚園教育実習でもその資質はすでに身につけているものとして求められる。保育者としての基礎的な知識や技術だけではなく、子どもの育ちや

生活に直接的にかかわるといふ役割の認識や、保護者や地域の子育て支援にかかわる役割として必要とされるコミュニケーション力も基本的にはすでに備わっているものとして求められている。大学時代に学んだ基礎的な知識や技術は、保育者としての経験を積み重ねるうちに豊かな力へと変わっていくことを期待している保育の場は多いと思われるが、保育者として育つにもその基盤となる「保育者らしさ」が保育実習・幼稚園教育実習の時から望まれている。

また、保育実習や幼稚園教育実習の経験は、その時限りで終了するわけではなく、次なる保育実習・教育実習へとつなぐ豊かな経験となることが望まれ、さらには、その後の保育職のキャリアの始まりととらえることもできるだろう。保育者養成校としての大学は、保育職としてのキャリアアップの見通しを持ち、保育職キャリアのスタートとして保育実習・教育実習を位置づけることが望まれる。したがって、養成校での教授内容はもとより、保育職としての基礎力養成に関わる指導内容の明確な目的と教員間の共通認識が必要となる。また、保育実習や教育実習が保育職キャリアラダーのどの位置にあたるのか明確にし、新任保育者の育ちとその先の見通しへとつなぐ共通意識を持って、保育職としての学びの機会を適切に提供できるようにすることが、保育者養成校に関わる教員間で共通認識されるべきだろう。

今回の研究では、実習生と新任保育者に求められる基

別刷請求先：野中千都，中村学園大学教育学部，〒814-0198 福岡市城南区別府5-7-1

E-mail：c-nonaka@nakamura-u.ac.jp

1) 中村学園大学教育学部准教授 2) 中村学園大学教育学部教授 3) 中村学園大学教育学部講師
 4) 中村学園大学教育学部助手

礎力について行ったアンケート調査をもとに、本学教育学部で保育担当科目を持つ教員がそれぞれの授業で行っている保育職としての基礎力につながる取り組みと今後の課題を考察したことの報告を行う。

2. 保育所保育士へのアンケート調査より

(1) 方法

保育所保育士を対象にアンケート調査を行った。このアンケートの項目は、経済産業省が提示している「社会人基礎力」をもとに、保育実習や幼稚園教育実習および保育関連科目に関する本学教育学部教員が「保育職として必要だと考える基礎力」として15項目を設定したものである。北九州市の保育所16園にアンケート調査協力を依頼、全ての園から計232名の保育士より回答が得られた。保育実習生および新任保育者を想定して、それぞれに期待する基礎力と実際の基礎力について1～5点で回答を依頼したものである。また、アンケート調査には自由記述欄も設け、実習生および新任保育者に対する期待や要望等について回答依頼をした。地理的に本学教育学部の受け入れが少なく、一般的な実習生や新任保育

者をイメージできることを保育所選定の条件とした。なお、アンケート項目は表1のとおりである。

自由記述では、実習生が実習開始までに備えておくことが望ましいことや、新任保育者が働くまでに備えておいてほしいことを記述できるように依頼した。

(2) 結果

① 実習生・新任保育者としての基礎力への期待と実際の差について

実習生、新任保育者それぞれにおける、期待される基礎力と実際の基礎力の差の検討のため、実習生の期待される基礎力の15項目それぞれの平均点と実際の基礎力の15項目それぞれの平均点についての t 検定と新任保育者の期待される基礎力の15項目それぞれの平均点と実際の基礎力の15項目それぞれの平均点についての t 検定を行い、平均値の比較を行った。結果、実習生、新任保育者、どちらも15項目全てにおいて、有意な差が認められ、期待される基礎力の方が実際の基礎力と比較して高く、実習生、新任保育者に関わらず、実際の基礎力と比較して高い期待を持たれていることが示された。

表1 アンケート項目

項目	項目の具体例の一部
①時間を守る	・決めた時間にスタートできるよう時間より少し前に到着するなどの準備ができる ・やむを得ず欠勤や遅刻をする場合は事前に連絡できる
②健康管理ができる	・健康を保つための体調管理ができる ・体調不良時の回復方法を知っている
③場にあった身だしなみを判断できる	
④様々な管理ができる	・持ち物の管理ができる ・スケジュールの管理ができる
⑤状況に応じた自己表現ができる	・自分から先に、時刻に応じた挨拶ができる ・場に応じた挨拶ができる ・不満を感じても表情には出さないよう気を付けることができる ・場に応じた温かい笑顔ができる ・約束を守ることができ、約束が困難な場合はその旨を伝えることができる
⑥共有する場での態度を判断できる	・場に応じた声の大きさを調整できる ・場に応じた態度ができる ・共有するものを大切に扱うことができる
⑦場に応じた言葉づかいや話し方ができる	・肯定表現や依頼表現を使用し、明るく話すことができる ・聞き取りやすい声でわかりやすく話すことができる ・相手の立場に立って思いやりをもって話すことができる ・場に応じた適切な敬語を使うことができる ・自己中心にならず、相手と会話することができる
⑧目的意識を持つことができる	仕事の目的を自ら考えるなどができる
⑨問題意識を持つことができる	疑問をもち、改善につなぐなどができる
⑩改善意識を持つことができる	どうしたらよりよくなるかなど考えることができる
⑪時間意識を持つことができる	期限を守ることやコストとしての時間を考えるなどができる
⑫責任意識を持つことができる	量・質・期限に対する責任等がもてる
⑬倫理意識を持つことができる	倫理的な判断ができる
⑭連絡・報告・相談ができる	必要に応じて連絡・報告・相談ができる
⑮他者と協働する意識を持つことができる	チームワークを持って活動する意識を持つことができる

※実習生に対する期待と実際、新任保育者に対する期待と実際を各1～5点で回答

② 期待・実際（評価）の基礎力の実習生と新任保育者の差について

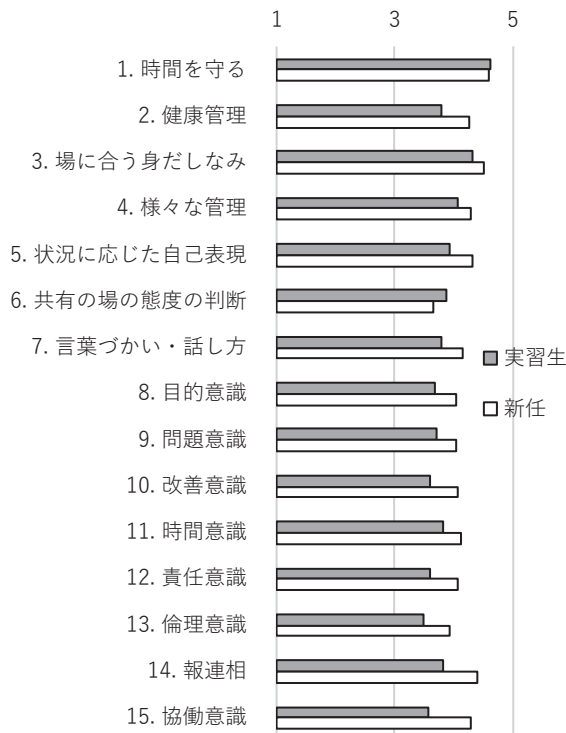


図1. 期待される基礎力の実習生と新任との差

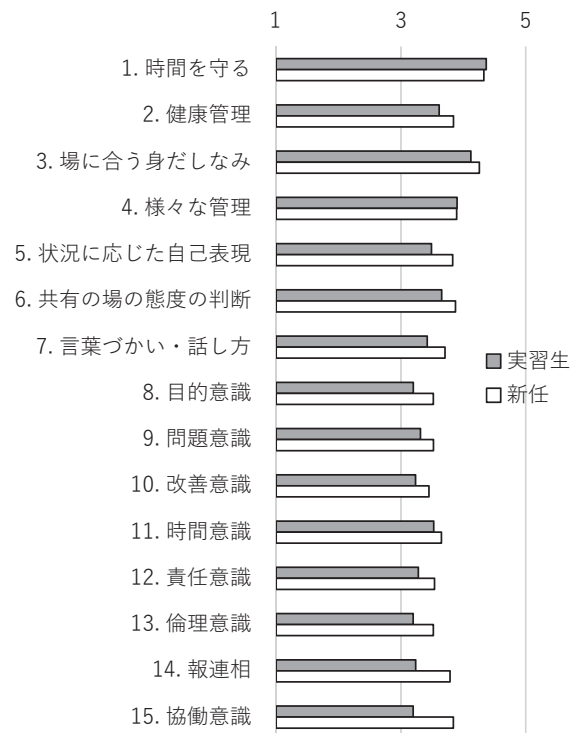


図2. 実際の基礎力の実習生と新任との差

期待される基礎力と実際の基礎力に関して実習生と新任保育者との差の検討のため、実習生の期待される基礎力と新任保育者の期待される基礎力15項目それぞれの平均値についての t 検定と実習生の実際の基礎力と新任保育者の実際の基礎力15項目それぞれの平均値についての t 検定を行った。結果、期待される基礎力に関しては、「①時間を守る」「⑥. 共有の場の態度の判断」を除く13項目において新任保育者の方が高く、「⑥共有の場の態度の判断」においては実習生の方が高かった。また実際の基礎力に関しては、「①時間を守る」「④様々な管理」以外の13項目において新任保育者の方が高かった。期待される基礎力に関しては、時間を守る、共有の場の態度の判断以外の面において、実習生よりも新任保育者に期待しており、共有の場の態度の判断に関しては、実習生により期待していることが示された。実際の基礎力に関しては、時間を守る、様々な管理以外の面において、実習生より新任保育者の方が高いと評価していることが示された。(図1および図2)

③ 勤務年数による期待・実際（評価）の基礎力の実習生と新任保育者の差について

実習生への基礎力の期待に関しては、「②健康管理」「⑤状況に応じた自己表現」「⑦場に応じた言葉づかいや話し方」「⑭報告・連絡・相談」「⑮協働意識」に

おいて、勤務年数3年未満の方が同3-10年よりも高い期待を持っていること、「⑬倫理意識」に関しては、勤務年数20年以上の方が同3-10年よりも高い期待を持っていることが示された。(図3)

実習生の基礎力の実際（評価）に関しては、「⑦場に応じた言葉づかい・話し方」「⑭連絡・報告・相談」「⑮協働意識」に関しては、勤務年数3年未満がその他より高い評価を行っていること、「⑩改善意識」「⑫責任意識」に関しては、勤務年数3年未満が20年以上よりも高い評価を行っていることが示された。(図4)

新任への期待に関しては、「⑤状況に応じた自己表現」「⑭連絡・報告・相談」において、勤務年数20年以上の方が同10-20年よりも高い期待を持っていること、「⑬倫理意識」に関しては、勤務年数20年以上の方が同3-10年よりも高い期待を持っていることが示された。(図5)

新任保育者の基礎力の実際（評価）に関しては、「④様々な管理」「⑤状況に応じた自己表現」「⑥共有する場での態度の判断」「⑧目的意識」「⑨問題意識」に関して、勤務年数3年未満の方が同20年以上と比較して高い評価を行っていることが示された。(図6)

これらのアンケート調査の結果を見ると、実習生・新任保育者への基礎力の期待と実際の差について、実

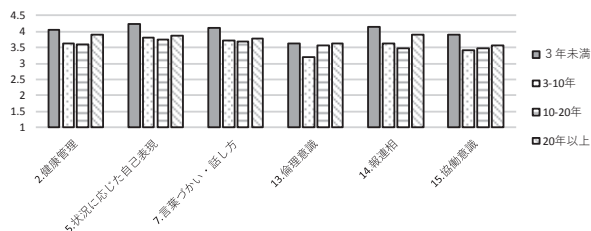


図3. 勤務年数による実習生への基礎力の期待の差

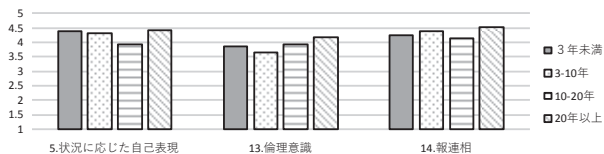


図5. 勤務年数による新任への基礎力の期待の差

習生、新任保育者に関わらず、全ての面において、期待される基礎力に実際の基礎力が伴っていないことが示された。また、期待・実際の基礎力の実習生と新任の差については、ほとんどの側面において、実習生よりも新任保育者に高い期待をしており、また実際にも高い評価を得ていることが示された。「①時間を守る」に関しては、差が見られず、実習生、新任保育者共に同程度の期待と評価を得ていることが示された。保育者の勤務年数により、実習生への期待と実際の評価、新任保育者への期待と実際の評価に差が認められ、実習生への期待に関しては、勤務年数3-10年よりも同3年未満が高い期待を持っており、実習生への評価は、同3年未満が高い評価を行っていることが示された。新任保育者に対しては、差がある項目は少なかったが、勤務年数30年以上が高い期待を持っていることが示され、実際への評価に関しては、勤務年数3年未満の方が同20年以上よりも高い評価を行っていることが示された。保育者歴が浅いと考えられる勤務年数3年未満の場合は、実習生に対しても新任保育者に対しても、高い期待と評価を行っている。勤務年数3-10年、同10-20年は、実習生や新任保育者に対しての期待が低い。勤務年数20年以上は、期待は高いが評価は低いという傾向が示された。

3. 保育関連授業担当者の取り組みの現状と課題

今回の保育所保育士に対するアンケート調査の自由記述によると「コミュニケーション」にかかわる記述が多く見られた。アンケート調査結果より、これらについて保育関連授業担当者は教科目の中でどのように取り組ん

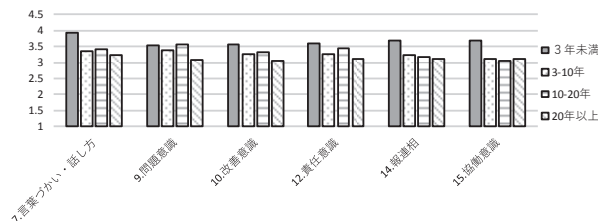


図4. 勤務年数による実習生の基礎力の評価の差

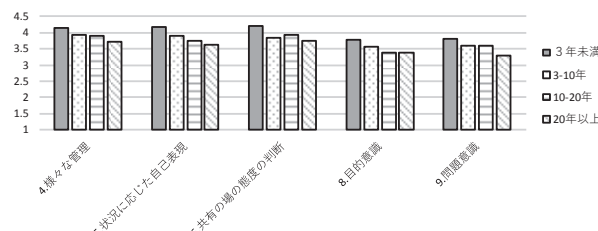


図6. 勤務年数による新任の基礎力の評価の差

でいるか、今後の課題は何かについて考察した。以下がその考察である。

(1) 実習にかかわる授業担当者による取り組みと課題

① 「保育所実習」「保育所実習研究」にかかわる授業担当者による取り組みと課題

保育学生には児童福祉従事者の社会的使命を十分に認識し実習に望むことが求められる。保育関連科目で獲得した専門知識と技術、保育現場の理解や、乳幼児や児童理解を深化させ自らの保育観を見つめ、保育士から直接学ぶ機会を通し、多角的に乳幼児教育をとらえる必要がある。そのため授業「保育所実習研究」の事前指導では実習態度を確認すると同時に基礎的な保育技能を構築する一端を担っている。例年、実習態度で「積極性に欠ける」傾向が課題に挙げられる本学では、集団の中で主体性の発揮を強化したアクティブラーニングを実施している。

しかしながら保育所実習評価の実際は、保育所実習Iで実習態度4項目は平均値3.3、知識・技術5項目は平均3.1と例年同傾向である。総合評価は「実習生として適切」が9割を占め、本学部の学生は高い水準にあるが、評価項目内容分析や個人の授業態度に目をむけると様々な課題が浮き彫りとなる。まず、実習中の態度は高評価順に「健康管理」「責任感」「探究心」「意欲・積極性」と並ぶ。最下位「意欲・積極性」項目の観点は、「主体的に行動し、生き生きと取り組む姿が認められた」「相手に応じた適切な挨拶や言葉遣いへの配慮と実際の表現ができた」「主体的な学習態度としての事前準備や努力を惜しまず、質問も積極的に行うことができた」である。これは決して保育の専門的な項目ではない。保育所保育指針や幼稚園教育要領に明記される「幼児期の終わりまでに育ってほしい

姿」そのものである。乳幼児期に関わる保育者を目指す学生の実習態度の最下位が「意欲・積極性」、つまり実習について「消極的態」であることが最大の課題なのである。

このような「消極的な態度」を有する学生傾向となる理由が2点考えられる。まず、「評価」の言葉に大変敏感で、自分の行動がどのように受け止められるのかを常に気にした結果、躊躇して行動に移せない「消極的な態度」であること、または保育者の多忙さを敏感に察知し、迷惑をかけないようにする気遣いから質問できずにいる状況が相手には伝わらず、実習に対して学ぶ意欲がない「消極的な態度」だと捉えられてしまっている理由が考えられる。さらに自己紹介の場面では「初めての实習で」や「人見知りなので」と前置きして未熟な自分であることを先に伝え、失敗を回避する自己防衛や、セルフ・ハンディキャップ傾向が見られる。学生に学ぶ意欲がないのではない。失敗への恐れと気遣いの理由を相手に伝えきれないコミュニケーション不足が山積している。そのため、失敗や恥をかくことを恐れない体験と小さな成功体験を繰り返す中で、自己肯定感につながる授業計画とサポートが必要である。

さて1年前期の幼児教育課程総論Ⅰでは、入学直後に10人で発表体験をする。くじによる他クラスとの班活動は交流を図らざるをえない上に、100人の前で発言する環境に置かれ、学生はわずか一人1分足らずの発言でも、強い緊張を超えた仲間と達成感を感じている。また1年前期の保育原理Aでは手遊びや教師役でテキスト内容を教え、学びをミニレポートでまとめる要約力と発信力、行動力が求められる。どの授業でも恥をかきながら克服する小さな成功体験の場面が設定されており、学生は何度も小さなつまづきと成功の体験を重ねている。今後いかに3年生が実習中に「学びとる力」を発揮する意欲・積極性に繋げるか、その方策が担当授業の共通課題である。(担当科目「保育所実習」「保育所実習研究」「幼児教育課程総論」「保育原理」)

② 「施設実習」「施設実習研究」にかかわる授業担当者による取り組みと課題

施設実習においては、保育所以外の児童福祉施設での実習となり、個人によって実習に行く実習施設の施設種が異なることになる。そのため実際の実習の内容も異なることとなる。しかしながら、どの施設での実習となったとしても、社会人としての基礎力は、当然のものとして身につけておく必要がある。

特に施設実習の場合は、被虐待児や障害児など特別な配慮が必要となる児童に直接関わり実習を行うこと

となる。そういった中では、時間を守ることや適切な態度を身につけておくことは前提として求められ、その上で児童の理解や特別な配慮についての指導が行われていることも少なくない。そのため実習の事前・事後指導となる実習研究においても、特に事前指導においては、時間を守ることや適切な態度や言葉遣いなどの基礎力を身につけることを、実習に行く前に身につけておくように指導を行っている。

またその際には、施設実習で関わることとなる児童は、関わりを持つ大人から様々な影響を受ける事を伝え、実習生の振る舞いや態度がそのまま児童に良い影響も悪い影響も与える可能性があることについても理解を促している。その中で、自身が様々な基礎力を身につける意味・意義についても考えさせ、実習を行うことやそのために学ぶことに関しての目的意識や問題意識、更には実習を通して児童と関わることの責任意識や倫理意識について自ら考える中で意識を持つように指導を行っている。

加えて施設実習では、施設種によっても異なるが、医師、看護師、社会福祉士、臨床心理士など保育士以外の専門職がいる施設での実習となることも多い。そういった施設では、他職種との連携が求められることとなるため、実習研究で他職種の理解や連携のあり方について学んだ上で、実際の実習において連携や協働のあり方を体験し、身につけることになる。(担当科目「施設実習」「施設実習研究」)

③ 「幼稚園教育実習」「幼稚園教育実習指導」にかかわる授業担当者による取り組みと課題

まず、筆者が担当している科目について、「社会人基礎力」の評価項目との関連を考察する。「教職研究」は1年次の教職課程における「教職の意義等に関する科目」である。教職課程の内容をこれから4年間修得していくにあたって、教職という職務について学ぶ最初の基礎的な科目である。したがって、教師になるために各回の授業内容を確実に習得していくために、「授業に毎回出席すること」「遅刻をせず5分前には着席して授業の環境づくりをすること」「教育の現場に入る前に、最低でも教職の教科書の内容を自分で読んで理解できるほど4年間頻りに活用すること」「授業内容を全て受け入れるのではなく疑問をもちながら聴き、自身の考えを表現できるようになることを意識する事」「前回の授業を踏まえかつ授業を受け続けながら、自身の考えを更に深く、広く思考すること」「授業の学びの振り返りを行う事」を授業第1回目のオリエンテーションで学生と共有した。その意味からは、「社会人基礎力」の項目の内、①「時間を守る」②「健康管理」⑧「目的意識をもつ」⑨「問題意識を

もつ」⑩「改善意識をもつ」⑪「時間意識をもつ」について学生と共有しながら授業を進めて行った。結果出席率は高く、授業後の振り返りシートにも質問や意見を多く記述する学生がほとんどであったと授業者は認識している。しかしながら、社会人基礎力育成の他の項目の部分も導入できる授業づくりを今後も工夫していく必要があると考える。

次に、「幼稚園教育実習指導A」及び「幼稚園教育実習指導B」の授業と「社会人基礎力」との関連について考察する。「幼稚園教育実習指導A」の科目は、幼保系3年次生の最初の本学付属幼稚園教育実習の準備と振り返りの授業である。また、「幼稚園教育実習指導B」の科目は、幼保系4年次生の最後の外部幼稚園教育実習の準備と振り返りの授業である。両授業においては、幼稚園免許取得だけにかぎらず最終的には幼稚園教諭として現場で保育の仕事をする人間を育てるという意味で、社会人としての保育者を育てることが根底にある科目である。したがって、「社会人基礎力」の項目の全て15項目を必然的に盛り込まなければならない授業であり、実際取り入れているといえる。その成果については学生により様々であるが、授業としては確実に取り入れているといえる。

最後に、「保育・教職実践演習（幼稚園）」の授業と「社会人基礎力」との関連について考察する。「保育・教職実践演習（幼稚園）」の科目は、幼保系教職課程における全ての実習を終えた4年次生が後期に受ける、保育現場に出る前の最後の保育・教職の理解を確認する科目で、4人の教員がオムニバスで授業を行っている。4月からの現場での職務を意識した科目であるので、「社会人基礎力」の全15項目を必然的に盛り込まなければならない科目である。学生の姿からは、社会人基礎力の全15項目が重要であることは理解しているようであるが、⑤「状況に応じた自己表現」⑥「共有の場の態度の判断」⑦「言葉づかい・話し方」⑨「問題意識」⑩「改善意識」⑫「責任意識」⑬「倫理意識」⑭「報連相」⑮「協働意識」については、大学で学んだという意識を持つことも大切であるが、現場に行っても自ら力をつける努力をしようという意欲を育てることが、大切なのではないかと筆者自身は考えている。（担当科目「幼稚園教育実習」「幼稚園教育実習指導」「教職研究」「保育・教職実践演習（幼稚園）」）

(2) 保育内容・方法にかかわる授業担当者による取り組みと課題

① 「保育内容健康」にかかわる授業担当者による取り組みと課題

「実習生として備えてほしい基礎力」として、挨拶、

言葉遣い、提出期限や時間を守るといった社会人としてのマナーの他、コミュニケーション力、観察力、文章を読む力・書く力等が挙げられている。本授業でも、様々な授業活動を通して、これらの基礎力を向上できるように働きかけている。

健康Ⅰでは、幼稚園、保育園の運動会見学を課している。学生は、運動会を見学し報告レポートを作成する。それに基づいて班ごとに話し合い、共通点や相違点を見出し考察する。さらに、まとめたものをクラス全体に報告し、幼児期の運動会のあり方について考えるという過程をとる。この過程では、書く力の他、コミュニケーション力や観察力を必要とする。班での話し合いでは、自分が見てきたことを相手に伝え、相手の意見を尊重しながらも自分の意見を述べ、班の意見をまとめていくことが求められ、活動の中でコミュニケーション力を養うことができる。また、話し合いの場面で、色々な視点を知ることにより、多面的に見る力や観察する力の育成につながると考える。

見学時のマナーに関しても、意見を出し合う。相手の立場で考えることにより、大勢で訪問しないこと、大声で話さないこと、メモを必死で取らないこと、写真を許可なくとらないことなど、学生の視点で見学のマナーに気づくことができる。

健康Ⅱでは、各テーマに沿って調査・研究・報告という形態をとっている。資料を読みまとめる作業や、聞き手に分かりやすい資料・報告原稿を作成する必要があるため、思考力の他、文章を読む力、書く力を養うと考える。聞き手も、毎時間、報告内容に対する質問、報告の良い点・改善点を見つけ、感想と共に書き記しており、思考力、観察力、書く力を鍛えられる。毎回、書いたものを回収し、各自が学んだ内容の他、文章表現、誤字脱字等のチェックをしている。

外部施設に調査に行く班には、電話でアポイントを取る際の留意点、言葉遣い、訪問時の服装、対応等、社会人としてのマナーに関して助言を行っている。調査の報告時には、外部施設での困難だった体験を話してもらい、クラス全体で共有する。例えば、不機嫌な電話対応をされ、声ひとつで感情が伝わることを実感した学生が、その体験を話すことによって、いかに丁寧な電話対応が大事であるかを全学生が学ぶことができる。個人の体験として終わらせないことが重要である、と考える。

また、防災センターに災害体験に行き、体験レポート及び指導案を作成している。指導案は、予め、園外保育の目的、指導計画上の留意点等を講義した上で、子どもを防災センターに連れていくことを想定し指導

計画をたてる。しかし、2年次の授業であり、まずは指導案を作成してみるという段階である。

挨拶、提出期限や時間を守る、報告・連絡・相談といった社会人として最低限必要なマナーは身につけてきていると感じている。しかし、観察力、書く力、読む力は、個々人の力量差に加え、学生の取り組む姿勢が関係しており、個人差が大きいのが現状である。また、班活動の場合、人任せの学生も生じるため、学びに繋がらないケースもある。活動の中で、個々の学生が何をどのように学んでいるかを把握し、いかに学生の学ぶ意欲を高め基礎力を向上させていくかが課題である。(担当科目「保育内容健康Ⅰ」「保育内容健康Ⅱ」)

② 「保育内容人間関係」にかかわる授業担当者による取り組みと課題

「保育内容人間関係Ⅰ」では、DVD視聴に基づく観察・記録から子供の心情や保育者のかかわりの意図を推察し理解することを、個別の学習およびペア学習、全体での討議を通し深めてきた。また、「保育内容人間関係Ⅱ」では、「保育内容人間関係Ⅰ」での学びをもとに模擬保育での観察・記録、参観者と実践者による討議から、参観者と実践者の視点や理解が異なることに気づき、それが保育を計画したり実践したりする上で求められる子供理解に繋がることを学んできた。

記録する上で、事実は何か、事実から推察されることは何かを明確に分けることを時間をかけ行ってきた。目の前で繰り返られる子供の言動や保育者のかかわりのどの部分を切取ってみるのか、その事実をどのように推察するのかは、個々によって異なり、そのことに気づき、共有することで決め付けではない他者理解へと繋がると考える。それは、実習生としての「書く力」や「思考力」、そして社会人としての「コミュニケーション力」に繋がると考える。

また、個々の記録をグループや全体で共有する際、自分の思いを伝えると同時に、受け取る側がいること、受け取る側の受け取り方は様々であることも含め考える時間、体験できる時間を設けている。その中で、批判ではなく共に協働するものとして議論すること、また、意見に対し「すみません」との謝罪ではなく自分の考えや意図を述べるよう伝えてきた。このことは、他者の意見に耳を傾け受け入れる「素直さ」や「謙虚さ」と同時に、保育者や保護者と協働していくためには、批判や謝罪ではなく、共に意見を出し合い考えていく社会人としての「コミュニケーション力」に繋がると考える。しかし、謝罪での応答や、言い悪いの評価あるいは答えを求めることも多々見受けら

れ、今後の課題と考える。

折に触れ、子どもは大人の姿(言動だけでなく、表情も含め)を良くも悪くも無意識的に取り入れること、故に、保育者である私たちは、常に人的環境として意識しておかなければ、与える影響力が大きいことを伝えるようにしている。授業を受けるときの姿勢(服装も含め)はどうか、今の話し方はどうだったのか、など社会人になってすぐにできるものではないこと、日頃の習慣は変わりにくいことを伝え、日々の生活の中で注意し合えるように促している。しかし、なかなか継続できていないのが課題である。(担当科目「保育内容人間関係Ⅰ」「保育内容人間関係Ⅱ」)

③ 「保育内容言葉」にかかわる授業担当者による取り組みと課題

「保育内容言葉」や「国語概論」の担当者として、アンケートの中の実習生や新任保育者に希望することを分析すると、「コミュニケーション力」という言葉が多数見られることに気づく。具体的には、「コミュニケーション能力」「人とのコミュニケーション」「コミュニケーションの取り方(対子ども、対大人)」「子どもとのコミュニケーション」といった語句で語られている。

コミュニケーション力とは会話力のことであり、話す力・聞く力という行為の総合力だと言える。アンケートの中の他の言葉では、話す・聞くに関わるものとして、「自分の言葉で話ができること」「はっきりとした口調で話すこと」「人の話を素直に聞くこと」「人の話や指導に素直に耳を傾ける」「人の話を聞く力」などがある。保育現場で求められるコミュニケーション力とはどのようなものか。単純化すれば、自分の言葉で表現できて、素直に他人の話を聞くことができる能力となる。

しかし、これは単純なようで難しい。さらに細かく考えるならば、アンケートの回答では、保育所内での上司に対するコミュニケーション力が中心に求められているように思われる。実習時の担当者などに対して、新任時の先輩に対して報告し、わからないことを訪ね、真摯に聞く態度が中心なのだろう。

「言葉づかい」という語句も多く見られ、敬語・丁寧語を中心とした先輩・上司への言葉づかいを類推させる。「すみません」「ありがとうございます」がいえるという回答もあり、挨拶にも通じる言葉づかいだろう。「雑談力」という言葉もあり、同僚や先輩との会話力というものも類推できる。

保育者に必要なコミュニケーション力と考えると、上記のような「先輩・上司に対する報告・相談・質問能力」「同僚との雑談力」などが一つだと言える。こ

の他には、アンケート内にも記されているが、子どもとのコミュニケーション力、保護者とのコミュニケーション力であろう。こうした力を、学生の中に養っていくことが必要とされている。これらの力は、小中学校・高等学校、そして家庭において獲得されておくべき力なのだが、学習指導要領にはずっと獲得の必要性が記述され続け、近年に至って、ついには高等教育である大学において養うことが要求されるようになったものである。

これらの力を領域の各科目や教職科目において、特に演習・実習科目において養っていく必要がある。保育内容言葉においても、同僚・上司・保護者・子どもに対して会話する力を養うべく展開していく必要がある。

またさらに、広く国語の力というふうにと考えると、「書く力」ということも指摘されている。実習生には「実習日誌の記入の仕方」「提出物の書き方」「記録の書き方」、新任者には「状況や心情等を文章で表す力」「メモのとり方」「日誌の書き方」などが回答されている。日誌については実習関連科目で指導するとしても、書く力は教職以外の科目においても重ねて指導していく必要があり、多くの科目で要求することによって獲得できる力だとも言える。(担当科目「保育内容言葉Ⅰ」「国語概論」)

④ 「保育内容表現造形」にかかわる授業担当者による取り組みと課題

保育内容表現造形Ⅰでは、「理論と制作を通して、乳幼児の造形表現に関する理解を深め、援助の仕方や造形活動の計画の立て方を学び、探求すること」を授業のねらいとしている。実習生として備えておくべき基礎力として、子どもの描く活動の発達段階等の知識、造形活動を行うための技能の育成等を重点的にやっている。授業の中で保育指導案の書き方や子どもの造形活動の映像を見て記録する活動を通して、学生の「観察力・思考力・書く力」の育成を目指している。さらに、保育指導案は、グループ内で発表し合い、それぞれの保育指導案の改善点を話し合う時間を設けている。互いに学びを共有し、協働で学びながら、友人間でコミュニケーションをとることも目的としている。

また、制作の際には、机の上に新聞を広く敷くこと、用具の使い方、洗い方、安全指導等、細やかな指導を心掛けている。そして、造形の授業では、掃除当番を設け、自分たちで掃除をする習慣をつけさせている。机の上のゴミは各自で捨てることなど、当然のことではあるが、マナーについて毎回指導している。

さらに、「自分自身の感性を磨き、作品を読み取る

力を育成する」ことを目的とし、美術館での美術展鑑賞を行い、美術館での鑑賞のマナーも指導している。課題として、美術展を鑑賞しての感想や「子どもだったらどのような視点で見えるだろうか」といった点について記載する鑑賞レポートを提出させ、コメントを付けて返却している。レポート等については、教員と学生との1対1のコミュニケーションであり、読み手を意識した書き方を事前指導している。レポートは、自分なりの解釈で、素直な驚きや不思議さ、想像したことを述べるなど、学生の感受性を育てるために有効ではないかと感じている。

保育士の資質として、豊かな人間性、感性を持つことは必要不可欠であり、それらを育て、子どもと一緒に造形活動を楽しむためにも「造形」の科目は重要であると考えられる。自らが作った作品において、自己表現を行い、友人の作品を認めることで、他者理解に繋がる時間にしたい。しかし、「こういう表現をしたい」という意欲を持ち、発展的な表現をするのではなく、無難に時間内で簡単に作り上げようとする傾向が見られるため、挑戦する心を持ってほしい。積極性や挑戦する心は実習生としても必要な資質であり、学生の創造性、制作意欲を刺激するような声掛けの工夫をこれからも目指していきたいと考える。(担当科目「保育内容表現造形Ⅰ」)

⑤ 「保育内容総論」「乳児保育」にかかわる授業担当者による取り組みと課題

「保育内容総論」および「乳児保育」は保育の内容・方法に関する科目である。他の担当科目を含め、授業では、時間を守ることや共有する場(教室等)での態度、提出物などの自己スケジュール管理ができること、状況に応じた自己表現ができることなどの学びを意識できるように取り入れている。「乳児保育」では、乳児保育の理念や3歳未満児の保育の内容・方法、計画および乳児保育における連携に関する学びを行う。2年次の開講ということもあり、実習経験がないからこそ、実際の乳児をイメージできるような授業内容を取り入れた展開としている。乳児の表現は未熟な状態であり、丁寧できめ細やかな大人の配慮が必要となる時期である。乳児にとって良い環境と保育を提供するためには、保育者を目指す学生が自らを客観的にとらえる経験ができることが重要と考えている。子どもの立場に立った自己表現ができるよう適切な自己表現ができるように、グループで着席できる教室配置にし「話す・聞く・伝え合う」場をデザインしている。

「保育内容総論」では、保育の全体的構造の理解や保育内容そのものの理解、保育内容と子ども理解との

かわり、養護と教育が一体的に展開する具体的保育実践の理解、保育の多様な展開の具体的理解などを教授内容（保育士養成課程等検討委員会「教科目の教授内容」2009）とし、本学教育学部では4年次後期に開講している。多くの養成校で1年次に開講することが多い科目ではあるが、本学部では1年次に保育の内容・方法に関する科目として他科目の開講もあり、これまでの実習経験や他の専門科目での学びの経験を踏まえ、より具体的実践的な授業内容に重心を置くことができている。

「保育内容総論」では、より実践的具体的な保育に関する学びを進める中で、随所に「保育者らしさ」が共通認識される場面があるように取り組んでいる。保育はそれぞれの保育者が自らの力を発揮しながら他の保育者や専門職と協働して行うものである。例を挙げて振り返る。保育の展開について学ぶ授業回の中には、まず自らが保育の展開について考察した計画を立案することで、自ら考えたり計画したりする時間を持ち、学生一人一人が時間意識や目的意識および責任意識を持って課題に取り組めるような仕組みを取り入れている。また、一人一人が取り組んだことをもとに、他の学生と少人数のグループワークを通して問題意識・改善意識・協働意識が持てるように、園でのクラス単位での活動の場面で協働できるような授業展開としている。授業担当者として留意していることは、展開を指示するのではなく、疑問を投げかけたりアイデアを共に考察したりすることを通して、授業を共に創る仲間としての役割を担うことがあげられる。グループワークの話し合いの場面でも肯定表現や依頼表現を使ったり、自己中心ではない話し方をしたりすることで、場の雰囲気作りも教員もともに行うように心がけている。コミュニケーション力は、他者と関わりながら豊かさを増すものである。保育が人と人をつなぐ側面を持つことから、保育者としての基礎力では欠かせないものがコミュニケーション力になり、その場その場での思考力と判断力も必要となるだろう。授業では同学年同年代の学生による関わりとなってしまうため、できるだけ他者との関わりを機会を得て、学生自らが学び続ける当事者として自信を持てるようにしたい。（担当科目：保育内容総論、乳児保育、保育内容言葉Ⅱ、児童文化表現、幼稚園教育実習、幼稚園教育実習指導）

(3) 保育の技術にかかわる授業担当者による取り組みと課題

① 「ピアノ」にかかわる授業担当者による取り組みと課題

「ピアノ基礎」「音楽Ⅰピアノ」「音楽Ⅱピアノ」は、

保育現場で活用できるためのピアノの演奏技能を身につける科目として位置づけており、基礎から段階的に技術を習得する内容となっている。授業を受講することによって、自身で楽譜を読み取って演奏するという基本的なことはもとより、少しでもその曲のもつ雰囲気や表現できるようにすることも目標に課題を習得している。これらの授業において、個人差はあるが、それぞれの力に応じて保育技術・技能を身につけ、高めることができていると思われる。

授業で習得する内容は保育技術・技能であるピアノの演奏であるが、そのためには日々の練習時間を確保することが必要である。学生には、毎日のスケジュールを立てて実行、さらに必要に応じて計画の見直し・実行することを喚起している。さらに課題習得に関しては、自己の現状把握をして身近な目標を設定すること、それに向かってどのように取り組むか計画を立て、実行するよう折に触れ話をしている。また、ピアノ演奏技術は、継続して反復練習を行うことで力がついていくものであるため、闇雲に反復練習を行っても効果は上がらないばかりか、間違ったことを身につけてしまうことになる。授業で指摘された問題点を把握し、改善するための練習を行うことも必要となる。また、授業を受ける基本的なマナーとして、遅刻・欠席をする場合は事前連絡をするよう指導している。また、授業形態は個人指導であるが、小グループごとに授業を受講するため、1名が指導を受けている時、他の1～2名は指導を見学して学んでいる。これにより、他者への指導の中から学び取る力も育つのではないかとと思われる。

これらのことから、現在のピアノの授業（上記3科目）においては、連絡すること、目標を立てること、計画を立てること、問題点を把握して改善すること、継続的に努力すること、以上の力が多少なりともついているのではないかと考える。

今後の課題としては、学年が進むにつれて、それらの力が向上していくことが望まれるところである。またこれらの授業において、更に養える可能性のある力としては、コミュニケーション能力が考えられる。今年度「ピアノ基礎」「音楽Ⅰピアノ」において、小グループをチームとして意識させることにより、練習や授業においてお互いに支え合い努力する姿がみられた。コミュニケーションを取ることで、仲間意識が生まれたものと思われる。しかし、2クラス混合での授業であるため、コミュニケーションの機会があまりないグループもあった。チームの活性化が、コミュニケーション能力が高まることに繋がるのではないかとと思われるため、今後どのようにチームを活性化させ

るかが課題となる。(担当科目「ピアノ基礎」「音楽Ⅰピアノ」「音楽Ⅱピアノ」)

② 「児童文化表現(言語表現の技術)」にかかわる授業担当者による取り組みと課題

保育者には、見通しを持って保育を行っていても突発的な事に対してその場で臨機応変に判断する力が求められることが多々あり、その判断は見通しを持って様々なことを思考する力とつながっているものである。特に、子どもや保護者に対応する場面では、どのような言葉・表情を選びどのような表現につなげるのかが、コミュニケーションの場面で必要となる。ここでは、「児童文化表現(言語技術の表現)」および「保育内容言葉Ⅱ」と合わせて、授業の取り組みを振り返る。どちらの授業も、教授内容とも重複しつつコミュニケーション力の育成につながるように、「話す・聞く・考える」ことを毎時間の中に組み込んでいる。「児童文化表現」は児童文化財を活用し、保育の場面を想定して実践し、実践したことについて課題を見つけてグループワークを取り入れるなどの工夫をしている。また、指導法に関わる「保育内容言葉Ⅱ」では、グループによる言葉の育ちに関わる児童文化財の作成、写真絵本の製作・保育案立案などを通してコミュニケーション力および思考力の育成に努めている。それぞれ授業で学んだと実感する授業後の感想は多いが、その学びを保育の実践につなげるような意識があるとは言いがたい。学生自らが自信を持ちながら学び続ける意識を高めることを今後の課題としたい。(担当科目；(2)-⑤と同様)

し、協働しながら学び続ける意識を持つことが重要だと思われる。

今後の研究展開としては、保育の場とのずれをさらに詳細に明らかにしつつ、どのような養成課程が望ましいのか検討を行う。

※この研究は、平成28~29年度中村学園大学プロジェクト研究の助成を受けている。

4. 今後の研究展開について

今回、保育所保育士を対象としたアンケート調査を実施し、その結果をもとに学部の保育関連科目を担当する教員で現状の取り組みと課題を考察する機会を得ることができた。保育所保育士へのアンケート調査実施の前には、アンケート協力園の保育士と保育関連授業担当者でインタビューを通じた語り合いをしており、実習や新任保育者の実際の様子を伝えあったり、アンケート調査の主旨を伝えたりすることで、調査に多くの意見やアイデアを取り入れることができた。何よりも大きな収穫は、語り合いの機会を得て、そのことをきっかけに、一つのことについて養成校と保育の場がともに考える機会を得たことだろう。また、学部内で保育関連授業担当教員と養成における共通認識についてともに考え語る機会を得たことも大きな収穫だったと思われる。保育士専門職への学びを進める学生のコミュニケーション力や思考力、協働性を育成するためにも、教員間で課題を共有